

横内 朝 YOKOUCHI Asa

Colors of KCUA2014 INVITATION -浮遊する意識-

横内朝インタビュー

——今回の「A bird on a balcony.」や過去の作品では恋愛を扱っているそうですが、横内さんは現代の恋愛とはどのようなものだと捉えていますか。

今回出品している作品に関して、現代の恋愛がもっとこうなれば良いなどと言った主張はありません。

私がいつも思っていることは、男女がよりわかり合えればいいな、という想いです。

恋愛で解り合えなくなることもありますよね。

恋愛と身体の変化が直結しているかいないか、それ一つをとっただけでも男女が心底理解しあうということは難しいことです。

それでも、恋愛という性の営みの中でこそ男女が性を越えて解り合える領域がある、私の中のその確信は、堂々と、今の私に繋がるテーマとなっています。

——現在のように制作を始めた、芸大に入ったきっかけを教えてください

本当の決心などというものはなかなか出来ずに、博士課程になるまでわからなかった自分の中のモチベーションというものもたくさんあります。

修士1年の頃は就職活動をしていました。

留学もしていました。

どういう道を選んでも苦しいことはあって、どういう道を選んでも生き甲斐を見つけてそれなりに頑張る自分も想像できました。

でもやっぱり、「どう生きたいか」だと思いました。

そう思ったとき、自分が社会とは少し離れたこの杳掛の土地で横目に5年あまり考えてきたことの60%くらいを、社会へのまともな適応のために捨てるのは、自分の人生の割に合わないと思いました。たった5年であっても。

その5年の間に、先生方も含め、素敵な作家の方々の苦しくも美しい後ろ姿を見てこれたことも、とても大きかったと思っています。

週半分は当時インターンにも行っていた企業で新郎新婦の接客業務をしています。

「新郎新婦の接客業務」と「制作」という二つが、妙な呼応をしながら、今の私の生活リズムとバランスを築いています。

———現在は制作と会社での勤務を両立されていますが、これからも両方を同時に続けていこうと思っていますか。

(仕事について)経済的な理由以外には、何よりも心から素敵だと思える商品と空間が職場であることに、偽りないモチベーションを持つことができます。

インポートドレスがほとんどを占めますが、白と質感の枠内で洗練され、考え抜かれた一着の物の美しさには、自分が普段考えてるものの全てを吹っ飛ばすほどの簡潔力があります。

そして、接客中、この人はどうしてこの人を選んだのだろう、と、考えます。

まだ夫婦じゃない、恋人でもない、この二人のことを考察します。

結婚は恋愛の終着点ではないと思っていますが、

たとえばある日、鳳凰の柄の白無垢を試着して、「どうやら」と言っている新婦に、新婦の父親が「ほうおう。」と言ってるのを聞いた新郎の微妙な口元に出会うその瞬間

私が今ここで、「確実に誰かが選んでいる幸せ」を支えられている仕事をしていることに誇りを持っています。

接客業なんて制作することとは真反対のベクトルのように見えるかもしれませんが、社会の中に作品を発信していく、ということを考えたときそれは私の中で同一線上にあります。新郎新婦への接客時だけではなく、一緒に働く社員さんこそ、結婚や仕事や性の選択肢の中で人生を生きている若い男女であることも身近で大きな関心です。

———作品を見る対象者として、特定の世代や性別を意識していますか。

意識はしていないのですが、若い世代に反応してもらうことの方が多くなっています。作っている私が若くて、且つ自分の等身大のものを作ろうとしている点で当たり前のことかもしれません。

そういった思いから、博士課程の活動として自身の作品制作だけではなく、議題を設けた勉強会やディスカッション、それをもとにした企画展やパフォーマンスなどをしていければと考えています。

恋愛議論所のようになるのかもしれませんが、私の作品を見たあと自分の恋愛についてごく自然に語ってくれたりする人も多く、芸術表現というものを通じて等身大で男女が胸のうちを議論できる場を設けられればと現在検討中です。

——作品を見た人にどのような影響を与えたいと思っていますか。

作品を見てくださった方には、昨日よりも今日自分の恋に感動してもらえれば、と願います。

それは男女に限ったことではないとも思いますし、現在や過去とも関係ないと思います。理解とはまったく反対のベクトルに向かうこともしばしばありますが、解り合えないから解ろうとする苦しい葛藤の中に価値観を大きく揺るがす涙や人生を共に出来るほどの意味があるのだと思います。

私の等身大とは、自分の心に出来るだけ忠実な距離で作ることで、見る人にも同じ距離で作品を届けたいと願っているフラットでシンプルなからくりなのです。

——今後の展望を教えてください（制作活動に限らず）

展望とはなんでしょう。

私は、自分が作品を作ることでまず自分自身、自分の存在に関わる領域を救えればと願っています。

自分という領域を救う責任は、私が作品を世に出す責任です。

「アートが人を救う」というのは人の生活に優しく寄り添うだけではなく、人の常識や平穏な生活を180度揺るがしたところで救えるものでもあると思っています。

何かの観念を説くのではなく、等身大のことが、誰かの等身大に繋がれば、今回の作品があることで、どこかの誰かの抱える「恋」と出会えれば、と切に願っています。

——お客様に一言おねがいします。

おとなの人生を変えるのは、

たいてい恋か、

仕事です。

(リクルートが「結婚」ではなく「恋」を選んでいた瞬間。株式会社リクルート 2014 年広告より)

